

第2章 河川整備計画の目標に関する事項

第1節 曾我葛城圏域の概要

(1) 圏域の概要

「曾我葛城圏域」は、図-1に示す範囲のとおり大和川流域の南西部に位置し、大和高田市、橿原市、御所市、香芝市、葛城市、三宅町、田原本町、高取町、明日香村、上牧町、王寺町、広陵町、河合町及び大淀町の5市8町1村より構成される。圏域の面積は約220.1km²(県土面積の約6%、大和川流域[奈良県域]の約31%)である。

圏域は我が国に農耕文化が始まって以来の歴史があり、大和と難波を結ぶ交通の要衝にあることから、多くの古社寺・古墳・住居および関連遺構・生産遺跡など、古代から近世に至る多くの歴史・文化資源が群集する地域である。

①地勢・地質

圏域の北部は標高70～80mの馬見丘陵のほかはほとんど起伏のない低平な沖積平野が広がり、西部の大阪府との府県境には標高1,000m級の金剛山・葛城山が、南部の竜門山地西端と東南部の巨勢山丘陵地は比較のおだやかな標高150m～350mの起伏をなしており、これらの山に端を発する葛城川水系・曾我川水系の河川が平地部をうるおしている。

地質は西南部の山地においては花崗閃緑岩が卓越しており、北東に広がる低平地は沖積層の未固結の礫・砂・粘土からなっている。

②気候

大和川流域の気候は内陸型を示し、年平均気温は奈良市で見ると15℃前後である。また、奈良盆地は昔から「日照り一番、水つき一番」と言われるように、圏域内にある當麻の年間降水量は約1400mmで全国平均の約1,830mmを大きく下回っているものの、梅雨期、台風期に集中する豪雨によりこれまで多くの災害が発生している。

③土地利用・人口

交通は、西名阪自動車道、南阪奈自動車道の有料道路のほか、国道は、東西に25号、165号、166号、309号、南北に24号、168号が走り、鉄道については、近鉄の大阪線、南大阪線、御所線、吉野線が、JRについては、関西本線、和歌山線、桜井線が縦横断している。京阪神地区に近接しているという地理的条件から、圏域の中下流域の丘陵地では住宅開発による市街地が広がっており、周辺の低地部は田園地帯が広がっている。

人口については、平成17年度で約36万人であり県人口の約25%が居住している。昭和35年から平成17年までの45年間に約2倍に増加しており、これは県全体の人口増加率(約1.8倍)とほぼ同じである。

④産業

住宅地開発の進展に伴い大規模小売店舗の進出など各種サービス産業の発展が著しい。農業については、稲作を中心に、野菜、果樹、花卉などの都市近郊型農業が展開されている。また、広陵町は、明治期より発達した県下有数の靴下生産地として知られているほか、伝統的な産業としては高取町のくすり(家庭配置薬)などがある。

⑤歴史

本圏域は、「^{ちかつ}近つ飛鳥」と称される大阪府の南河内と飛鳥の間に位置し、古代より在地豪族の活動が活発に見られた地域であり、大規模な古墳や社寺が点在している。葛城地域は、古代において葛城国と呼ばれる地域首長圏の中心地であったと推測されており、馬見丘陵に点在する古墳は、この葛城氏ゆかりのものと考えられている。また、この地域は、葛城氏のほか、蘇我氏や巨勢氏など古代を代表する豪族の根拠地であった。圏域内の河川の多くは、古代に中国大陸につながる水上公易の場を果たした大和川に流れ出る河川であり、各沿岸部を勢力圏にもつ豪族たちによって管理運営されたと考えられるが、律令体制下では行政支配に組み込まれていった。

中世には河川周辺の多くが田畑となり、河川は農業用水の供給源となった。現在の圏域内の河川を見ると多数の屈曲部があり、井堰も多くつくられている。年間降水量の少ない奈良盆地では川を人工的に屈曲させて、流水線を延長し勾配を緩めるなどして保水能力を高め、各田畑に水が行き渡らせるための工事が、領主・農民によって行われた結果と考えられる。

また、近世に入り商業経済の発展を背景に、それまでの米麦を中心とする農業経営から用水不足を緩和する方策として綿花、菜種などの特産品栽培が盛んに行われるようになると、木綿・ほしか（干鰯）を中心に大阪との水上運搬・舟運が盛行し、大和川本川と派生する圏域内各河川にはそのための川泊（港）が営まれた。

これらの河川の歴史は、中・近世を通じて農民達が治水・利水のために闘ってきた歴史でもあり、川の補修、築堤工事、請堤、ため池など、汗と力と知恵と工夫の痕跡が各所に残っている。

曾我川の歴史：

奈良盆地西南部の巨勢丘陵に源を発し、橿原市で平野部に入り、葛城川、高田川の支川を合わせて大和川本川に注ぐ。大和川との合流部の河合町川合には砂かけまつりでも知られる広瀬神社がある。多数の支川が集まるこの地は、河川の氾濫と干ばつに悩まされてきた一方、水運の要衝地でもあった。近世には干鰯などを積んで大和川から遡航した魚梁船が曾我川では但馬（三宅町）、松本（田原本町）まで達した。また、曾我川を横断する橿原市曾我町付近の国道24号バイパス建設に伴う発掘により大規模な玉造りの工房跡と見られる曾我遺跡が見つかり、6・7世紀を代表する大豪族の根拠地と見られる。周辺には蘇我氏本宗家ゆかりの宗我坐宗我都比古神社があるなど蘇我氏の経済的な基盤を支えた地域でもあったと考えられている。

葛城川の歴史：

上流の山地部を除きそのほとんどの区間が天井川であるため、過去に幾度となく堤防決壊による洪水被害を受けている。特に御所市では、そこまで急勾配であった流れが急に流速を失う部分に位置し、金剛・葛城両山からは多量の土砂を流出させては川底を埋めることなどから、過去においても洪水を起こしてきた。大きな洪水の記録としては、元文5（1740）年（“御所流れ”）、文化12（1815）年、明治元（1868）年がある。万葉集の「巨勢にある能登瀬の川の後も逢はむ 妹には我はいまにあらずと」という歌は、柳田川が合流する御所市役所のあたりのことを歌ったものと考えられている。また平野部には、大和高田市の藤森や広陵町の南郷など、中世を起源とする周囲を壕に囲まれた環濠集落が多く分布しており、現在もその遺構をとどめる集落が残されている。

高田川の歴史：

金剛山に発し、曾我川と平行して北流し、曾我川に合流する。下流部の馬見丘陵の東側斜面を中心に特別史跡の巢山古墳、牧野古墳など古墳時代前期から後期にかけての100余りの大小の古墳からなる馬見古墳群がある。大和高田市の市街地の中心部を南北に流れていた高田川は、昭和初期に市街地の西端に付け替えられた。その廢川敷を道路化したのが現在の中央道路（主要地方道大和高田斑鳩線）である。

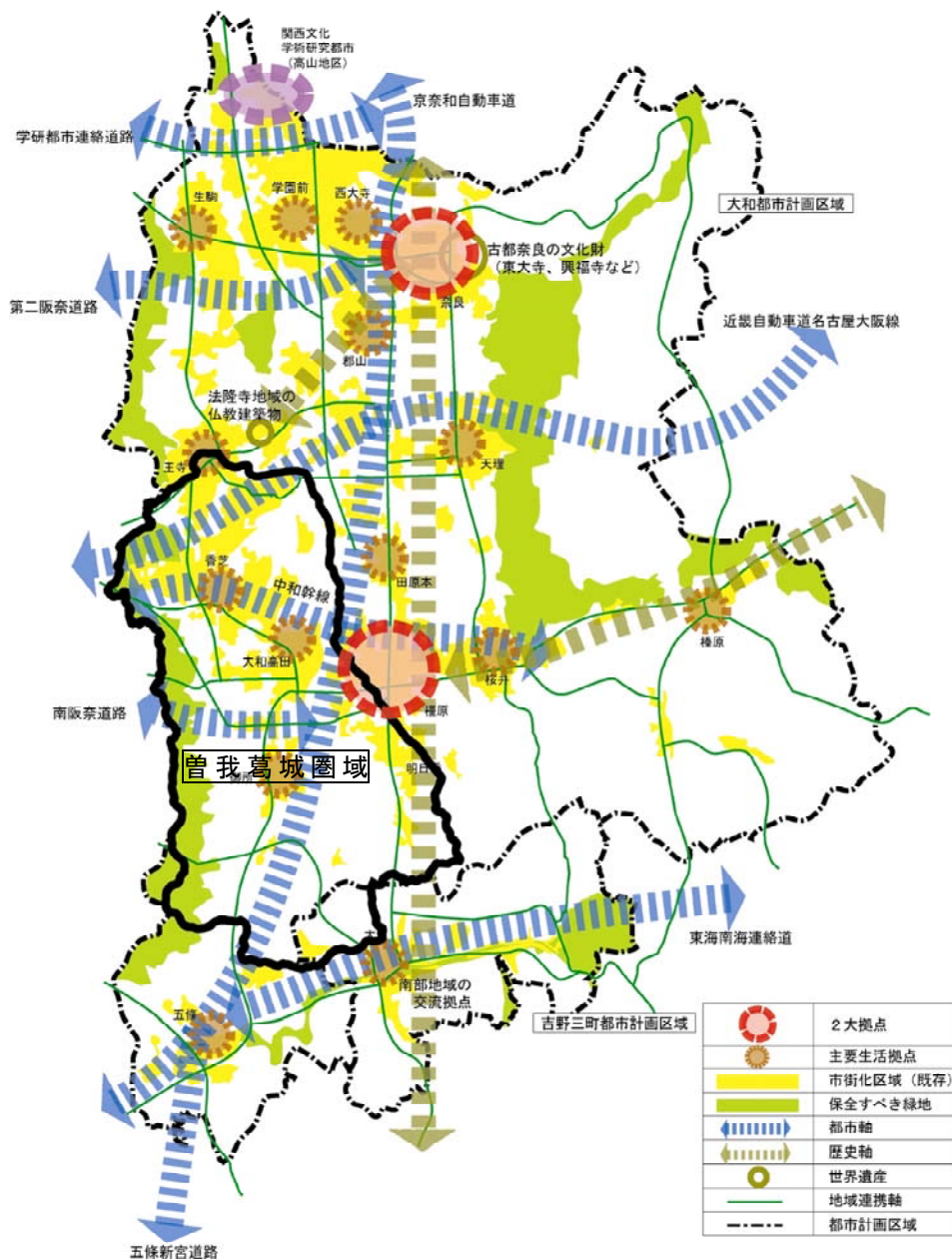
⑥将来像

本圏域の特徴として、交通の要衝としての重要性があげられる。古代においては、奈良盆地の北側に通じる下ツ道に交わる難波（大阪）への横大路が主要な幹線道路として位置していた。このような東西交通軸と南北交通軸の交わる結節点としての役割は現代においても生きており、京都から奈良を南北に縦貫し、和歌山を結ぶ京奈和軸、大阪から奈良を横断し、三重・名古屋を結ぶ南阪名軸が交差する地域である。これらの交通軸は関西国際空港や京阪奈丘陵で開発が進む関西文化学術研究都市の形成などにより、今後、より重要なものとなることから、地域の拠点としての位置づけは一層高まって行くものと言える。

このように本圏域は優れた歴史的文化的遺産を有するとともに、将来にも広域的な基幹交通軸の結節点としての重要な役割を有する地域であることから、古代から続く歴史的文化的遺産を継承し、拠点都市としての都市機能の充実を図り、地域に根付く個性ある産業とくらしを育てていくことが基本となる。

こうした中で河川は、葛下川、曾我川、葛城川、高田川を中心として、歴史的文化的遺産や景観に配慮しながら総合的な治水対策により洪水に対する安全性の確保とともに、潤い・自然・レクリエーション等の場を提供する重要な空間軸として位置づけられている。

またこれからは、地域づくりの様々な場面において、住民との連携・協働による施策の推進が期待されている。



図－1 奈良県都市計画区域全体の将来都市構造のイメージ図

(2) 圏域内河川の概要

一級河川大和川水系に含まれ、県管理河川は全部で54河川(管理延長約177km)である。このうち、主なものでは大和川の一次支川である曾我川、葛下川があり、また、曾我川の支川である葛城川、高田川がある。

曾我川は、奈良盆地の西南部に位置する巨勢丘陵にその源を發し、薬水川、朝町川、今木川、吉備川、満願寺川の支川を合わせて北流し、橿原市において平野部に流入し、高取川、坊城川、小金打川を合わせ、盆地の中央で葛城川、高田川の支川を合わせて大和川に合流する、流域面積156km²、流路延長約25kmの河川である。なお、大和川合流点より上流、葛城川合流点までは国管理区間となっている。

葛下川は奈良盆地の西部に位置する岩橋山付近にその源を發し、大和高田市において平野部に流入し、岩谷川、熊谷川、初田川、鳥居川などの支川を合わせて北流し、中流部から下流部にかけて、すがる川、竹田川、平野川、^{にんじ}尼寺川ならびに滝川を合わせて流下し、奈良盆地の中央西側王寺付近で大和川と合流する流域面積約47km²、流路延長約15kmの河川である。流域は、中央部を西名阪自動車道が横断し、河道沿いにJ R和歌山線、上流部には近鉄大阪線と、交通の便に恵まれた環境にある。市街地が8割を占めており、川沿いには密集市街地が多い。

葛城川は葛城山系金剛山に源を發し、深谷川、南太田川、三宅川、天満川、^{どど}百百川を合わせて曾我川に沿って北流し、住吉川、^{どんご}土庫川を合わせ、広陵町において曾我川に合流する、流域面積約51km²、流路延長約23kmの河川である。

高田川は金剛山に源を發し、高田川北流、柿本川、^{かんだ}甘田川、小柳川、太田川、尾張川、馬見川を合わせて流下し、河合町において曾我川に合流する、流域面積約27km²、流路延長約13kmの河川である。

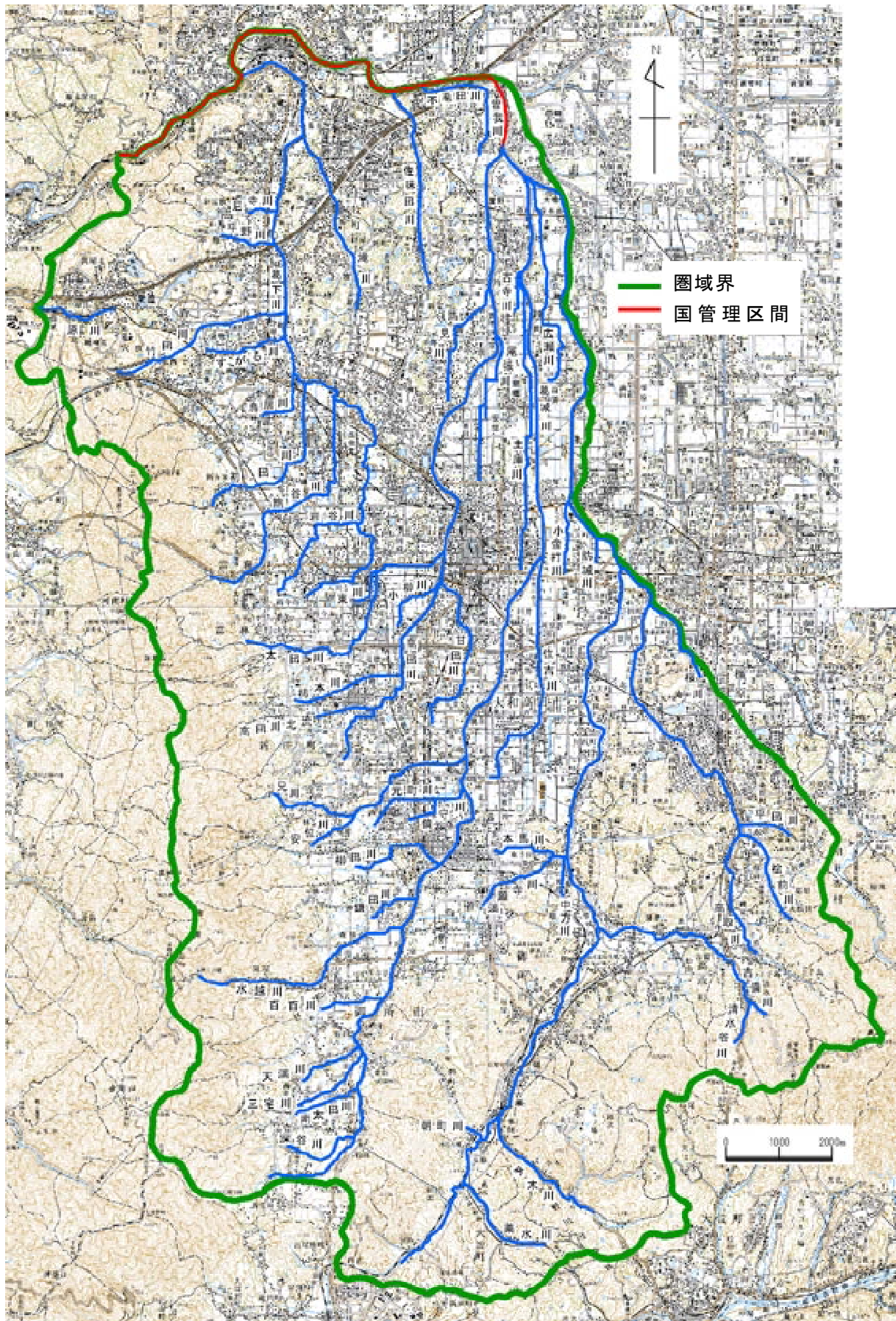


图-3 河川图